

日本占領下北京日本語ラジオ講座について

－講師柯政和とその『初級日語講座読本』を中心に－

鄒 淑娟

About the Japanese Broadcasting Lecture of Beijing under Japanese Occupation

－Focusing on Ke Zhenghe and His Textbook “*Chuji Riyu Jiangzuo Duben*”－

Zou Shujuan

本文以史料重新确认了日伪时期北京广播电台日语广播讲座的实施情况，重点考察前期日语广播讲座讲师柯政和及其所编撰的《北京中央广播电台 初级日语讲座读本》。

柯政和是民国时期著名的音乐教育家及日伪政权的支持者，但人们对其参与日语教育活动之事迹知之甚少。本文对柯政和的日语教育活动进行了考察，通过明确其曾作为讲师参与北京近代科学图书馆开办的日语基础讲座，担任前期北京日语广播讲座讲师，并编写了广播讲座教材，还发表了关于日语教育的相关论文等具体事实，揭示出其作为日语教育者之鲜为人知的一面。在此基础上对其编写的广播讲座教材《北京中央广播电台初级日语讲座读本》进行了分析，通过与同时其它期教材的对比，总结出其三大特点。其一为重视日语书面文言文教学，以看懂日语书刊文章为目的；其二为强调日语教学应从对照语言学的角度出发注重中日语言结构的不同，以此达到加深理解减少误用的目的；其三为发挥自己的专业专长，利用音乐的音高理论帮助学习者更好地理解日语音调，并采用歌曲作为练习发音和听力的辅助教材。

キーワード：占領地日本語教育、放送日本語講座、放送日本語講座用教材、柯政和

1. はじめに

戦前の植民地・戦時中の占領地における日本語教育は日本植民地教育史研究の主要な対象であるだけでなく、日本語教育史の重要な一側面として位置付けられている。近年、植民地・占領地における日本語ラジオ講座が注目的となっている。上田（2022）は戦時中南方、マレー半島、インドネシア、中国華北地区、朝鮮における日本語ラジオ講座について、使用する教科書などを通して、その全容を概観している。中国大陸の「華北占領地」について、天津で実施した日本語ラジオ講座に言及し、ラジオ講座用テキスト『初級日語廣播教授課本』を紹介している。実は、小黒（1987）、王（2016）、鄒（2023）によって、日本占領下の華北地区の中心都市で、親日政権の実質的首都だった北京¹でもラジオ放送による日本語講座が実施されていたとの指摘がある。このように、華北占領地のラジオ放送による日本語教育を知るには北京における日本語ラジオ講座の実態を明らかにする必要がある。

本稿では、日本占領下の北京における日本語教育について明らかにされた点を確認した上で、未解明のままになっている放送日本語講座を対象として、その講師の日本語教育の考え方及び講座用教科書の特色に対する分析を通して、その具体的な中身を考察するものである。これによって、日本占領下の北京における日本語教育の全容解明の一助とする。

¹ この当時の名称は「北平」。本稿では、現在の名称を用いる。1937年7月末北京の陥落直後に親日勢力による「北平地方治安維持会」が組織された。同年12月14日、中華民国の首都南京陥落翌日に日本軍主導による「中華民国臨時政府」が設立され、北平が親日政府の首都となった。1940年3月、汪兆銘の「中華民国臨時政府」が南京で発足した後、「臨時政府」は「華北政務委員会」に改められたが、華北地区の「首都」である地位には変わりがなかった。

2. 先行研究と問題の所在

2.1 日本占領下北京の日本語教育

1937年7月7日の盧溝橋事件が発端となって日本による対中侵略戦争は全面的に勃発した。7月末、陥落と共に、「昭和十二年七月事変勃発して、北支の各地がその影響下に日本語の教育はその対策の一刻も猶予すべからざる当面の現実的問題となった。」²とあるように支配権確立に日本語教育が重要な課題とされ、北京における日本語教育が急がれた。

このような方針のもとで、日本占領下の北京における日本語教育は小・中学校、大学などの「教育機関」、日本の出先機関である外務省所管の北京近代科学図書館³の主催による日語講座や日語講習所、それに民間の日本語教育活動が中心となって、様々な形で展開された。「教育機関」における日本語教育は志賀（1995）、北京近代科学図書館の日本語教育事業は小黒（1987）、張我軍を中心とした民間の日本語教育活動は賈（2019）によって明らかにされている。しかしながら、これらの先行研究では小黒（1987）を除いて当時北京におけるラジオ放送による日本語教育には触れていない。

2.2 北京の日本語ラジオ講座について

小黒（1987）は北京近代科学図書館の日本語教育事業について考察する中で、同館の『館刊』第二号（1938年2月刊行）の記載に基づいて、1937年9月8日から始まった同館における放送日本語の受講活動⁴を紹介

² 『北京近代科学図書館概況』昭和14年、p23

³ 1936年9月に創設された植民地図書館で、設立当初は外務省の所管だったが、対中政策の見直しに伴い、所管は興亜院へ、その後は大東亜省へと移っていく。1945年8月閉館。

⁴ 「(1937年)九月初め北京放送局から日語講座が放送されるのを利用して一時の応急策として本館備付の受信機を以て一般希望者に聴講させ……」（『館刊』第二號p194）、「北京廣播電台日語講座放送…毎週一三五午後五時至三十分之日語放送時間……」（『館刊』第二號p190）

介している。これは北京の日本語ラジオ講座に関する最初の指摘である。王（2016）も同じ資料に従って、同様の指摘をしている。鄒（2023）は在中華民国（北平）大使館が1937年12月付外務大臣（廣田弘毅）へ宛てた報告書⁵を通して、北京近代科学図書館の日本語ラジオ講座の受講活動を確認した。このように、小黑（1987）、王（2016）、鄒（2023）によって、北京における日本語ラジオ講座は1937年9月初旬に始まったことが知られることとなった。鄒（2023）はさらに、興亜院⁶華北連絡部の調査報告⁷によって、北京での日本語ラジオ講座は1940年以降も続いていたこととラジオ講座用教材『日本語大要』の出版情報から聴講者数が50万人以上⁸に上ったという新しい事実を突き止めた。また、北京日本語ラジオ講座で中心的な役割を果たしていた人物は前期が音楽教育家として高名な柯政和、後期は植民地日本語教育の第一人者で当時新民学院⁹の教授山口喜一郎と高等警官学校¹⁰教授の益田信夫で、使用する教科書は、初期は柯政和編の『初級日語講座読本』、後期は山口・益田共編の『日本語入門』『日本語初歩』『日本語大要』『日本語大成』というシリーズ教材であったことも明らかにした。

このように、日本占領下の北京における日本語ラジオ講座の開始時期、実施期間、聴取者数、主要な講師、使用教科書などの概要が明らかにされた。しかし、教育内容や教授法など具体的な中身については不明なま

5 「九月初旬當地北京放送局ニテ毎週月、水、金曜午後五時ヨリ三十分間日本語講座ノ放送ヲ開始セラレタルを利用シテ一時ノ応急策トシテ本館備付ノ受信機ヲ以テ一般希望者ニ聴講セシムル…、開始ノ九月八日当日は…」『北京近代科学図書館事業中間報告提出ノ件』

6 興亜院は第一次近衛内閣の対中国政策の一環として対中諸機関の統合を目的に、昭和13年に発足した内閣直屬機関。同17年、大東亜省設置により廃止。

7 「日本語普及ヲ目的トセル日語学校、日語講習所、ラヂオニ依ル日本語講義有リ…」『華北ニ於ケル日本語普及状況 其ノ五（最終編）』「第四編 北京特別市日本語普及状況」p42

8 山口喜一郎・益田信夫編、1940年刊。奥付に「自授教以來、各地收聽者、不下五十萬人……」と講座放送開始以來の聴衆数が50万人を下らないと述べている。

9 1938年初めて親日政府が日本主導の下で設立した華北占領地行政官僚の養成学校、1943年に校名は華北行政学院に改められる。

10 北京陥落後、日本軍主導で設立された警官養成学校。

まとなっている。本稿では前期で中心的な役割を果たした講師柯政和と教科書に焦点を当てて、柯政和のそれまで知られることのなかった日本語教育活動と日本語教育に関する考え方に対する考察及び彼による教科書『北京中央廣播電台 初級日語講座読本』（以下『初級日語講座読本』と略す）に対する分析を通して、北京日本語ラジオ講座の具体的な中身の一端を明らかにする。

3. 日本語教育者としての柯政和について

3.1 柯政和の生い立ちとその音楽活動

柯政和の生涯は、孫（1997）、郭（2008）、鄭（2022）などの先行研究によって多くが解明されている。以下では、鄭（2022）に従って、その生涯について概観する（脚注は本稿筆者による補足）。

柯政和の原名は丁醜、字は安士、本籍は福建安溪。1890年¹¹に台湾の嘉義で生まれ、台湾総督府国語学校卒業後、教師として母校の教壇に立った。1911年、公費留学生として東京音楽学校に入学、ピアノと作曲理論を三年間学んだ後、1915年に台湾に戻り、母校で音楽教師として教鞭を執る。1919年、再び日本へ渡り、東京音楽学校研究科で学んだ後、上智大学文学部に進学した。1922年秋、音楽教師を目指して日本を離れて北京へ向かい、北京で名を政和に改めた。1924年、国立北平師範大学¹²の音楽教員となる。以来、北京陥落まで、多くの音楽関係の書籍を刊行した。また、学校以外でも、1929年6月に音楽団体愛美楽社を結成して、音楽雑誌『新楽潮』を創刊するなど社会一般へ向けた音楽の普及活動にも精力的に取り組み、ピアノ、バイオリン、合唱など日本で学んだ西洋

¹¹ 1889年の説もある。『現代中華民国満州帝人名鑑』、『中国紳士録』などはこの説を採用している。

¹² 現在は北京師範大学。北京陥落後、国立北平大学、北洋工学院とともに西安に疎開して合同で西北連合大学を設立。

音楽の知識を中国に伝え、中国における近代音楽の教育と普及に大きな足跡を残した。

1937年北京陥落後、柯政和は日本主導による親日政府を支持する立場に立ち、華北教育総会及びその後に設立された中華民国新民会¹³で要職に着き、親日政府の北京師範学院¹⁴音楽系初代主任を務める¹⁵など、親日政府の中教育行政と文化事業行政で指導的な地位にあった。

日本敗戦後、その政治的立場が問われ漢奸（漢民族の裏切り者）として起訴されたが、台湾出身という理由により特別措置で釈放され、北京師範大学の教壇に戻った。人民共和国時代、文化大革命の時に漢奸として裁判にかけられ、1979年病死した。

表1 柯政和の音楽に関する主な著述

書名	出版社	刊行年
音楽通論	中華樂社	1930
鋼琴（ピアノ）独奏曲集 上編	中華樂社	不詳
鋼琴（ピアノ）独奏曲集 下編	中華樂社	1931
提琴（バイオリン）独奏曲集	中華樂社	不詳
改訂拜耳鋼琴（バイエルピアノ）教科書	中華樂社	1931
初中模範唱歌教科書（一）（二）	中華樂社	1933
提琴（バイオリン）名曲集	中華樂社	1933
初中模範唱歌教科書（三）	新民音樂書局	1935
高中模範唱歌教科書	中華樂社	1933
初中模範樂理教科書	中華樂社	1933
哈農六十鋼琴（ハノンピアノ）練習曲集	中華樂社	1934

¹³ 日本占領下の華北で、北支方面軍の主導により、親日傀儡政府を擁護し、民衆の親日化を推し進めるための民衆教化団体。

¹⁴ 親日政府が1938年4月に旧国立北平師範大学の跡地で設立した大学。

¹⁵ 「柯政和在男校仿日本体制建立了音乐科，于1938年8月任该科主任、教授，并兼任训导长。」『中国近现代音乐家伝』（第一卷）p177

師範標準唱歌教科書	中華樂社	1934
鄉村師範標準唱歌教科書	中華樂社	1934
初小模範音樂教科書	中華樂社	1935-1937
初小模範音樂教科書伴奏譜	中華樂社	1935
高小模範音樂教科書伴奏譜	中華樂社	1935
高小模範音樂教科書	中国教育音樂促進會	1935
拜耳鋼琴教科書	中華樂社	1935
中国小學音樂教本伴奏譜	中国教育音樂促進會	1936
中国中學音樂教本	中国教育音樂促進會	1936
實用初中唱歌教科書	中国教育音樂促進會	1936
初小模範唱遊教科書	中国教育音樂促進會	1936
高小音樂教科書	新民音樂書局	1941
初小音樂教科書	新民音樂書局	1941
初小唱遊教科書	新民音樂書局	1941
初小模範唱遊教科書（第二版）	新民音樂書局	1943

（本稿筆者調べ）

3.2 柯政和の日本語教育活動

3.2.1 日語基礎講座講師

柯政和の著名な音楽教育家と親日政府の支持者としての事蹟は既に明らかにされている。しかし、彼には日本語教育者という未知の一面もある。

前述したように、盧溝橋事件後、北京を中心とした華北地区の支配権確立において、日本語教育が最主要的な課題として位置付けられた。こうした中、「本館が日本語教育に従事するに至ったのも矢張直接には事変の勃発を契機として……前提として日本語の教育をなすことを要請されざるを得ない。」¹⁶とあるように、日本語教育の旗振り役となったのは、

¹⁶ 『北京近代科学図書館概況』、p22

上述の対中文化工作の拠点である日本の出先機関の北京近代科学図書館であった。こうした要請に基づいて、北京近代科学図書館は日本語教育の諸活動を展開していた。放送日本語講座を聴講するためのラジオ機と施設の提供、放送日本語講座の補講と補充講座の開催¹⁷の他、1937年11月11日から、自らの主催による講習会である3ヶ月の「日語基礎講座」を開講した¹⁸。当初の予定は定員40名（1クラス）だったが、165名の応募者が殺到したため、定員を1クラス60名に増員するとともに、クラス数を二つに増やし、第一班は11月11日より毎週火・木・金・日曜日、第二班は11月13日より、月・水・土・日を開講した。授業時間は午前8：30から9：20までである。第一班の講師は元国立北京師範大学教授だった柯政和で、第二班の講師は元清華大学教授の錢稻孫¹⁹である。これは、柯政和が日本語教育活動の始まりである。

3. 2. 2 日本語ラジオ講座の講師と日本語教材の編集

北京陥落後、北京廣播電台は1937年9月初旬より、日本語ラジオ講座の放送を始めた。第一期は終了後復習放送に入り、翌年2月に終了した。その後、1938年2月7日から、17：30より30分間の「日語講座」の定例放送を開始し、講師は時の新民会中央指導部委員で、元北京師範大学教授の柯政和であった²⁰。この講座は1939年9月14日まで延べ481講²¹を放

¹⁷ 北京近代科学図書館『館刊』第二號、pp.187-190

¹⁸ 「日語基礎講座開講期自十一月十一日起預定三個月終了……」北京近代科学図書館『館刊』第二號、p188

¹⁹ 清華大学は北京陥落後に、北京大学、南開大学ともに内陸部に疎開、長沙で西南連合大学を設立した。北京市内にある校舎は日本軍に占拠され、錢稻孫は北京に留まる同大学の資産を保護するための清華大学保管委員会の一員。

²⁰ 1938年2月8日付『警察日刊』3版掲載のラジオ放送番組表「北京中央廣播電台廣播節目」に、五時三十分「日語講座（第二講）中華民國新民会中央指導部委員 前北京師範大学教授 柯政和」とある。

²¹ 1939年9月14日付『青島新民報』8版掲載のラジオ放送番組表「今日節目」に十八時三十分「日語講座（北京）（第四八一講）」とある。

送し、北京の他に、天津、唐山、青島、保定、石家莊など華北各地でも中継され、柯政和は1年7ヶ月にわたって、その481講の講座を担当した。このように、柯政和が前期で北京の日本語ラジオ講座を支える中心人物だったことが分かる。

講師を担当するだけでなく、柯政和は自らラジオ講座用教科書『初級日語講座読本』も編纂した。この教科書については次節で詳しく論じる。

3.2.3 日本語教育に関する考え

日本占領下の華北では、親日化を推し進めるための手段としての日本語教育の在り方については大出正篤を代表とする対訳法と山口喜一郎を代表とする直接法など様々な模索が行われていた。直接法の具体的実践例として、山口（1940）は放送日本語講座初級教材の冒頭で次のように述べている。

開始學習外國語言的人、最初就不應當傾注全力於讀文字、寫文字、或是去併命記憶多量的種種龐雜的語彙、開頭無論如何應該養成聽懂話語的耳力並應該漸漸養成能正確地發表簡單的事情的能力、這是最要緊的。……

一、莫藉漢字和字母去記憶言語、應當直接藉語音記憶言語。

一、用耳朵大体記憶之後、在復習的時候自己一方面念一方面寫出來纔好。²²

（外國語を初めて習う人は最初の頃は文字を読んだり書いたりすることとなるべく多くの雑多の単語を覚えることに全力を傾注してはならない。初めの頃はなんといっても外国語音を聞き取れる聴力を

²² 『北京中央廣播電台短期學習 日本語入門』「聽講放送時之注意」

獲得し、そして徐々に簡単なことを正確に表現できる能力を身につけるべきで、これは最も肝心なことである。

- 一、漢字と字母で日本語を覚えてはならない。直接聞いた発音で日本語を覚えるべき。
- 一、耳で大体記憶した後、復習する時口に出しながら書いた方がよい。(日本語訳は本稿筆者による。以下同じ)

このように、山口の直接法は母語の干渉を極力排除した聞くことと話すことに重点を置いた教授法である。このような考えのもと、山口が手掛ける初級放送日本語教材『日本語入門』『日本語初歩』『日本語大要』は助詞の「は」が「ワ」、「へ」が「エ」、「を」が「オ」へ改められる「純粋的表音式」²³という発音通りに書く仮名遣いを採用している。

柯政和は、「日本語の普及は興亜大業の基礎である」²⁴と述べるなど、中国における日本語教育の位置づけと目的に対する認識および中国人に対する日本語は外国語として教えるべきという基本的な考え方は当時の多くの日本語教育関係者との間に違いがないが、日本語教育法については自らの考えを持っていた。まず、教授目標について、聞くこと・話すことを教授目標とする直接法の考えについて、「一部分だけを発達させるのは、畸形の語学である。中国に普及する日本語は畸形であってはならない」²⁵と批判し、「完全な語学とは聞く・話す・読む・書く四技能を平均に発達させるべきだ」²⁶と主張している。そして、中国に於ける日本語教育は、「もちろん話すことも必要であるが、それよりも寧ろ日本の書籍によって、日本の文化を吸収することが、より一層重要であらねば

²³ 注22に同じ。

²⁴ 柯(1942) p14

²⁵ 柯(1942) p15

²⁶ 注25に同じ。

ならぬと考へられるのである」²⁷との問題意識から、四技能の内、読むことが一番重要だとしている。

教授法については、直接法と訳読法がそれぞれに一長一短あって、是非を断定しがたく、生徒によって変更すべきだとした上で、次のように述べている。

中國人に日本語の意味を徹底させるには、中國語を利用する方が、最も有効で、決して邪魔にならない。勿論會話する時に當っては、或は日本語ばかりを使ひ、或は日本語を中國語に譯させたり、または中國語を日本語に譯させたりして、初めて正確な日本語を教へることが出来るのである。それで、日系教員は、完全な日本語を中國人に教へるには、どうしても中國語を勉強せねばならない。²⁸

その中で、中国人学習者の場合、訳読法の方が向いているので、日本人の教員が中国語の知識が必要であるとの見方が示されている。

また、中国人学習者を対象とする場合の注意事項の一つとして、日本語を中国人に教えるには日本語と中国語の差異点を知る必要があることを挙げている。現在で言えば対照言語学的視点が必要だということである。両言語の差異点として、類型面では日本語は膠着語、中国語は孤立語であること、発音の面では日本語の濁音、促音、ラ行音は中国人学習者に難しいこと、アクセントの面では日本語は平靜で、中国語は起伏が多いこと、語順の面では中国語はSVOで日本語はSOVであること、日本語は男女によって階級によって違うが、中国語には男女による差異がない、などを具体例として挙げている。

²⁷ 柯 (1942) p17

²⁸ 柯 (1942) p19

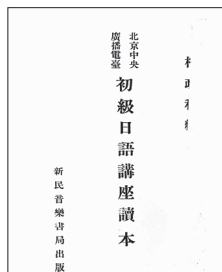
教科書が採用する仮名遣いについても、「標音仮名遣を教はつた者は、日本の新聞、雑誌、書籍を読んでも、仮名遣が違ふから、さつぱり解らない」²⁹との理由から日本語の普通の書籍に用いられているもの（歴史的仮名遣）を採用すべきだと主張している。

こうした日本語教育に関する考えは彼の『初級日本語講座読本』に反映されている。

4. 『初級日本語講座読本』の特徴

4.1 『初級日本語講座読本』の書誌と体裁

書名は『北京中央廣播電台 初級日本語講座読本』、1冊1巻で、1939年6月新民音楽書局の発行である。書名から北京中央廣播電台による放送日本語講座の初級日本語教材であることが分かる。例言、目次、課文（七十課）、答案、歌曲（十二曲）より構成されている。



例言は凡例で、放送講座用教材として、この教材の方針について11カ条を挙げて説明している。概要は以下の通りである。

- ①本書は北京中央廣播電台日本語講座用教材である。
- ②本教材は初級編と高級編の二冊からなり、初級編は片仮名、高級編は平仮名を使用する。
- ③本冊には70課からなり、自習できるように、各課に日本語漢訳と漢語日訳の練習問題を設ける
- ④学習者の「話す・読む・書く」力を養成すべく、日本語で最も難しい助詞の説明をなるべく詳しく説明する。

²⁹ 柯 (1942) p17

⑤日本語の仮名遣いには「正当的仮名」（歴史的仮名遣い）と「発音的仮名」（表音式仮名遣い）があり、日本の書籍、新聞、雑誌などの文章は歴史的仮名遣いを使用していることから、外国人向けの表音式仮名遣いではなく、難しい歴史的仮名遣いを採用する。

⑥聴く力を養成できるように、日本語の発音を示すには記号を用いないこととする。

⑦日本語と中国語の音程は異なり、音楽理論を用いてわかりやすく説明する。

⑧本書の中国語訳文は標準的な中国語である。

⑨自習で参考できるように、練習の答案を全て巻末に載せている。

⑩聴く力と発音の練習及び日本語に触れる機会が増えるように、巻末に歌曲を載せている。

⑪自習できるように、放送時に行った説明を文字にして別途『日語講座読本自修書』として刊行する予定である。

『高級日語講座用教科書』と『日語講座読本自習書』を刊行すると宣言しているが、出版された形跡はない。

4.2 『初級日語講座読本』の内容構成

表2は『初級日語講座読本』の目次である。

表2 『初級日語講座読本』目次

課	題 目	課	題 目
第1課	ア行・カ行	第36課	デ
第2課	サ行・タ行	第37課	テハ
第3課	ナ行・ハ行	第38課	デハ
第4課	マ行・ヤ行	第39課	テモ
第5課	ラ行・ワ行	第40課	デモ
第6課	五十音圖	第41課	上一段活用

第7課	ト	第42課	バ
第8課	ノ	第43課	下サイ・上ゲマス
第9課	ガ行・ザ行	第44課	ナサイ
第10課	ダ行・バ行	第45課	略字・合略字
第11課	バ行	第46課	カラ・マデ
第12課	ン	第47課	カラ・ノデ
第13課	ハ・デス・カ	第48課	ガ・ケレドモ
第14課	ドレ	第49課	タイ・タクナイ
第15課	促音	第50課	マイ
第16課	コノ・ソノ・アノ	第51課	ヨリ
第17課	ガ	第52課	ダケ
第18課	拗音	第53課	ダノ
第19課	ニ	第54課	漢字的讀法
第20課	居マス・居リマス	第55課	名數
第21課	長音（一）	第56課	下一段活用
第22課	ヲ	第57課	時
第23課	マス・マシタ・マセウ	第58課	尊卑語ノ比較
第24課	長音（二）	第59課	年・月・日
第25課	ヘ	第60課	朝ノ挨拶
第26課	形容詞	第61課	度量衡
第27課	テ居マス	第62課	晝ノ挨拶
第28課	拗長音	第63課	通貨
第29課	ヤ	第64課	晩ノ挨拶
第30課	モ	第65課	路ヲ尋ネル
第31課	轉呼音	第66課	訪問（一）
第32課	マセン・ナイ・ヌ	第67課	訪問（二）
第33課	十品詞	第68課	買物（一）
第34課	四段活用	第69課	買物（二）
第35課	テ	第70課	買物（三）

内容は、発音・仮名・漢字、品詞分類・助詞類・体言・用言、敬語類、会話などが含まれている。発音・仮名・文字は五十音、濁音、半濁音、撥音、促音・拗音、長音、拗長音、転呼音、漢字の読み方、略字・合略字で、計18課。品詞分類は1課、助詞類は計24課。体言は指示代名詞、数詞、量詞、年月日、曜日、時刻、通貨の計7課で、用言は形容詞、四

段活用、上一段活用、下一段活用、命令形を含め、計6課。敬語類は丁寧体、尊卑語、授受関係で、計5課がある。会話は挨拶、道を尋ねる、訪問、買い物で、計9課である。

その中、助詞類は全体の三分の一以上を占めているのが大きな特徴となっている。

4.3 『初級日語講座読本』の特徴

日本占領下の華北地区では、放送日本語講座用初級教材として他に華北廣播無線電台編『初級日語廣播教授課本』と北京中央廣播電台の山口・益田共編による『日本語入門』『日本語初歩』『日本語大要』がある。放送日本語講座の具体的内容を知るのにはこれらの教科書に対する分析が必要である。三者には違いが少なからず見受けられる。例えば、仮名については、三者ともカタカナを用いる点で一致しているが、発音の説明においては、『初級日語廣播教授課本』は、「ワタクシ 哇他哭西」のように日本語の発音を中国語の発音が近い漢字（「哇他哭西」）で充てている。『日本語入門』では、五十音の読み方を「注音符号³⁰」という中国語の発音記号を用いて示している。一方、柯政和の『初級日語講座読本』はより正確な発音が習得できるように注音符号など中国語の要素を一切排除すると宣言している³¹。これらとの比較から見られた柯政和の『初級日語講座読本』の主な特徴を次にまとめる。

³⁰ 1918年に「国語注音符号第一式」として導入された中国語の音声表記法で、中国語の音節を構成する声母と韻母を別々に示す符号より構成されている。

³¹ 『初級日語講座読本』「例言その六」

4.3.1 「読む」ことを重視する

(1) 歴史的仮名遣いを採用する

『初級日語廣播教授課本』と『日本語入門』は発音通りに書く表音式仮名遣いを採用し、『日本語入門』にいたっては、前述した通り、助詞の「は、へ、を」を「ワ、エ、オ」に改める徹底ぶりだった。これに対し、『初級日語講座読本』は歴史的仮名遣いを採用している。その理由については、柯政和は「例言」で次のように説明している。

日語所用的仮名有正当的仮名和発音的仮名兩種。前者是日文書籍、報章、雜誌等所用者、極其複雜、後者為外国人學習日語之便利將難改易、將複雜改為簡單者、此種弁法對初學者之能操日語、雖說不無可取、但日後讀起日文書籍立即感受困難、所以較為完善的弁法、非改學正当的仮名不可。³²

(日本語の仮名遣いは正当的仮名遣いと発音的仮名遣いの二種類があり、前者は日本語の書籍、新聞、雑誌等で用いられるもので、きわめて複雑で、後者は外国人の日本語学習にあたって難しいものを易しいものに、複雑なものを簡単なものに直したもので、この方法は初學者の日本語学習にとって悪いこととは言えないが、日本語の書籍を読む際直ちに困難を感じるはずである。よって、よりよい方法としては正当的仮名遣いを習った方がよい。)

この中で、柯政和は歴史仮名遣いを「正当的仮名」、発音通りに書く仮名遣いを「発音的仮名」と読んでいる。中国における日本語教育は日本の書籍によって日本の文化を吸収することがより重要であるとの立場

³² 『初級日語講座読本』「例言その五」

から、聴く、話す、読む、書く四技能の内、読むことを最優先にしている。よって、下記のように同教科書には、他の放送日本語教科書に見られない歴史仮名遣いの習得に必要な転呼音（第31課）、四段活用（第34課）、それに文書を読むのに必要な略字・合略字（第45課）の内容が含まれている。著者の日本語教育に対する考え方を反映している。

（2）転呼音

転呼音の課では、仮名表記と実際の読み方が違うケースを、五つに分けて説明している。

- ①ハヒフヘホ → ワキウエロ (ハ行転呼)
 例：カハ → カワ ニハトリ → ニワトリ
- ②ア段+ウ → オ段長音
 例：アウム → オウム サウダン → ソウダン
- ③エ段+ウ/フ → イ段のヨ付きの拗長音
 例：ケウイク → キョウイク レウリ → リョウリ
- ④イ段+ウ/フ → イ段のユ付きの拗長音
 例：ニウガク → ニュウガク リウスイ → リュウスイ
- ⑤クワ→カ グワ→ガ (合拗音の直音化)

（3）四段活用

四段活用も文語体の特徴の一つである。第34課では、動詞「行く」の活用形として、未然形（行カナイ、行カウ）、連用形（行キ）、終止形（行ク）、連体形（行ク）、已然形（行ケバ）、命令形（行ケ）を挙げて例文で示している。「行カナイ、行カウ」とあるように「ナイ」と「ウ」が付く未然形の語尾はどちらも「(行)カ」となっている。

(4) 略字と合略字

略字と合略字は日本語の文章でよく用いられる記号である。日本語の文章が読めるように、第45課で以下のように略字と合略字を四種類ずつ挙げて、説明している。

略字：ナナツ→ナ、ツ ちち→ちゝ 人人→人々

ウンウン→ウンへ

合略字：㇇ → コト ㇈ → こと ㇉ → トキ

㇊ → トモ

4.3.2 中国語との相違点に重点を置く

前述したように、柯(1942)は、中国人学習者に日本語を教える際、両言語の違いについて知ることを注意事項の一つとして挙げている。『初級日語講座読本』にはそのような著者の考えがよく表れている。以下がその例である。

(1) 助詞を重んずる

柯政和は上掲の例言その四で、日本語で最も難しい部分が助詞であり、特に詳しく説明する必要があると述べている。柯(1942)は中国語が孤立語で、日本語が膠着語であると強調していることから、その理由がわかる。即ち、膠着語の特徴である後置型の助詞、助動詞は孤立語である中国語のそれとは違うからである。『初級日語廣播教授課本』と『日本語入門』は助詞類を取り扱う課をほとんど設けていないのに対し、この教科書では助詞類を取り扱う課が全体の三分の一以上を占めているのが両言語の違いを重視する姿勢の表れであることは明白である。

表3 『初級日語講座読本』で課として扱う助詞類

ト、ノ、ハ、カ、ガ、ニ、ヲ、ヘ、テ、デ、テハ、デハ、テモ、デモ、バ、カラ・マデ、カラ・ノデ、ガ・ケレドモ、ヨリ、ダケ、ダノ、デス、マス、ナイ、ヌ、マイ

表3は、本書が課として取り扱う助詞類の一覧である。用法については説明が書かれていないが、例文と訳文で示されている。例えば、「デ」の場合、表4のように12個の例文を挙げて中国語との対訳を通して用法の違いを示している。

表4 『初級日語講座読本』「第36課 デ」

例文	中国語訳
1 コレハ私ノ帽子 <u>デ</u> 、アレハ貴方ノ帽子 <u>デス</u> 。	這是我的帽子、 <u>那</u> 是您的帽子。
2 赤イノハ林檎 <u>デ</u> 、白イノハ梨 <u>デス</u> 。	紅的 <u>是</u> 蘋果、 <u>白</u> 的 <u>是</u> 梨。
3 萬年筆 <u>デ</u> 、手紙ヲ書キマシタ。	<u>用</u> 自來水筆寫了信。
4 薬 <u>デ</u> 、病氣ヲ治シマシタ。	<u>用</u> 藥治病。
5 日本語 <u>デ</u> 話シマシタ。	<u>用</u> 日語說了。
6 彼ハ盲腸炎 <u>デ</u> 、死ニマシタ。	他 <u>因</u> 為患盲腸炎死了。
7 地震 <u>デ</u> 、家ガ倒レマシタ。	<u>因</u> 為地震、房子倒了。
8 病氣 <u>デ</u> 、学校ヲ休ンダ。	<u>因</u> 病、學校請假了。
9 市場 <u>デ</u> 、林檎ト梨ヲ買ヒマシタ。	<u>在</u> 市場買了蘋果和梨。
10 此ノ時計ハ拾圓 <u>デ</u> 買ヒマシタ。	這個錶是拾元買的。
11 彼ノ寫眞ハ、北海公園 <u>デ</u> 撮ッタノ <u>デス</u> 。	那張像片 <u>是</u> 在北海公園照的。
12 昨日ハ公園 <u>デ</u> 、飯ヲ食ベマシタ。	昨天 <u>在</u> 公園吃的飯。

例文1、2の「デ」は、中止の用法で、中国語には相当する形式がないため、中国語の訳文では読点「、」で示している。例文3、4、5、10の「デ」は「手段・道具」の用法で中国語の訳文では「手段・道具」を表す前置詞「用/以」³³に訳している。例文6、7、8の「デ」は「原

因」の用法で、原因を表す接続詞「因為」に訳している。例文9、11、12では、「デ」は「場所」の用法で、中国語の訳文では場所を表す前置詞「在」に対応させている。

(2) 形容詞

『初級日語廣播教授課本』と『日本語入門』の形容詞を取り扱う課では、形容詞文や形容詞の活用形が取り上げられているのに対して、この教科書の「形容詞」の課も中国語との違いを示す内容となっている。表5のように、この教科書の「第26課 形容詞」で取扱う形容詞の例文は全て連体形の用法となっている。

表5 『初級日語講座読本』「第26課 形容詞」の例文

例文	中国語訳
1 泰山ハ高イ山デ有リマス。	泰山是高的山。
2 西山ハ低イ山デ有リマス。	西山是低的山。
3 北京ニ大キイ學校ガ有リマス。	北京有大的學校。
4 其處ニ在ル小サイ家ハ、私ノ友達ノ家デス。	那邊的小房子是我朋友的房子。
5 黄河ニ長イ鐵橋ガ有リマス。	黄河有長的鐵橋。
6 蘆溝橋ハ短イ橋デス。	蘆溝橋是短的橋。
7 庭ニ赤イ花ガ有リマス。	院子裡有紅花。
8 机ノ上ニ白イ紙ガ有リマス。	桌上有白紙。

日本語では、形容詞の連体修飾は連体形を使用するのに対し、中国語の形容詞が体言を修飾する場合も一部の一音節形容詞を除き（例文7と例文8）、名詞と同じ日本語の「の」にあたる助詞「的」が必要である。日本語の形容詞の連体修飾は中国人日本語学習者によく見られる誤用の

33 「用」は口語、「以」は文語。

一つで、「形容詞」の課に連体用法の例文しかないのは、こうした日本語と中国語の違いを意識したものであることが明白である。

(3) 指示代名詞

『初級日語廣播教授課本』と『日本語入門』では、指示代名詞を取り扱う課はともに「これ、それ、あれ」を取り上げるのに対し、この教科書は「この、その、あの」を取り扱っている。これも中国語との違いを意識したものである。

表6 『初級日語講座読本』「第16課 コノ、ソノ、アノ」

日本語	中国語
問：此 <u>ノ</u> 本ハ誰ノデスカ。 答：其 <u>ノ</u> 本ハ私ノデス。	問：這本書是誰的？ 答：那本書是我的。
問：彼 <u>ノ</u> 犬ハ誰ノ犬デスカ。 答：彼 <u>ノ</u> 犬ハ其ノ人ノ犬デス。	問：那條狗是誰的狗？ 答：那條狗是其他的狗。

中国語には日本語の「これ」「それ」「あれ」に対応する「这、那」があるが、連体用法の「この」「その」「あの」に対応するものはない。中国語では、指示代名詞「这、那」が直接名詞を修飾することができるのに対し、日本語は指示代名詞が体言を修飾する場合、「これ、それ、あれ」ではなくその連体形式「この、その、あの」を使わなければならない。ここでも中国人日本語学習者にとって誤用が生じやすい点に焦点を当てている。

4.3.3 音楽家としての工夫

柯政和は音楽教育家としてよく知られている。この教科書にはその音楽家としての視点と工夫が見られ、『初級日語廣播教授課本』と『日本

語入門』にない特色の一つとなっている。日本語のアクセントの違いについて、「例言その七」で音楽理論を用いて説明するとあるが、教科書の本文には具体的な説明がない。柯（1942：17）の「日本語のアクセントは二度音程の変化しかないが、中国語のアクセントは四度音程まで跳躍する」との記述を通して著者の考え方を知ることが可能である。まずは「音程³⁴」という高さを表す音楽用語から両言語のアクセントがともに高さのアクセントと認識していることが分かる。次に、日本語のアクセントは「二度音程の変化」で高さの異なる高低二種類しかないのに対し、中国語のアクセントは「四度音程の変化」で高さが異なる四種類³⁵であるとして、両言語のアクセントパターンの数が違うと指摘している。このように、音楽理論の視点から両言語のアクセントの違いをとらえていることがわかる。

また、「例言⑩」で、歌がリスニングと発音練習の材料になるとの見方を示し、実際に表7の通り12曲の歌を採録している。

ところが、表7に示すように、この12曲の内4曲は中国語の歌で、日本語のリスニングと発音練習の材料としては不向きと言わざるをえない。この4曲はいずれも親日政府に関係する歌であり、日本の国歌「君が代」と第二国歌と呼ばれていた「愛国行進曲」を加えると、政治的な歌は半数を占める。著者の新民会中央指導部委員で、日本政府の支持者と協力者としての政治的立場を如実に反映している。

³⁴ 音程とは、2つの音の高さの関係。または2つの音の間隔のことをいい、高さは度数、性質は長、短、完全、増、減で表す。

³⁵ 当時北京音はすでに標準音として制定されている。その北京音には陰平（高平調）、陽平（上昇調）、上声（降昇調）、去声（下降調）四種類の声調がある。

表7 『初級日語講座読本』の採録歌曲

歌曲名	歌曲情報
① 卿雲歌	親日中華民国維新政府 ³⁶ の国歌（中国語）
② 新民會歌	新民会会歌（中国語）
③ 黃族青年歌	「大東亜共栄」を吹聴する親日政府の唱歌（中国語）
④ 五色旗之下	親日中華民国臨時政府の国歌（中国語）
⑤ 君が代	日本の国歌
⑪ 愛國行進曲	戦時中日本軍の愛唱歌
⑥ 櫻	童謡唱歌
⑦ 春が來夕	童謡唱歌
⑧ 夕焼小焼	童謡唱歌
⑨ カゾヘウタ	童謡唱歌
⑩ 荒城ノ月	童謡唱歌
⑫ 港	童謡唱歌

戦時中の植民地、占領地における日本語教材に同化、協和政策の一環として大東亜共栄を謳歌する歌を掲載する例は決して稀ではない。例えば、中央協和会³⁷が在日朝鮮人向けに編集した日本語教科書『協和国語読本指導要領』（1944年刊）の付録にも「愛国行進曲」が掲載されている。掲載の目的は「外地人を指導教化、尽忠の精神を啓培する」³⁸ことにあり、語学学習という目的によるものではないことが明白である。柯政和のように、補助教材として歌を利用することは極めて珍しい工夫と言わざるを得ない。

³⁶ 1938年3月中支方面軍の支持で、南京で設立された親日政府。

³⁷ 日本の朝鮮植民地支配の時期、在日朝鮮人に対する内務省、警察当局を中心とした統制機関。

³⁸ 「第一に、協和事業は、外地の人々を、内地生活を基準として指導教化して、生活の安定向上を図り、尽忠の精神を啓培するのであります。」武田行雄（1940）『協和事業とはどんなものか』財団法人中央協和会、p12

5. まとめと今後の課題

本稿は日本占領下の北京で実施されていた日本語ラジオ講座の実態解明の一端として、前期の講師柯政和とその編纂によるラジオ講座用教材を通してその具体的な中身について考察を行った。

その結果、柯政和については、音楽教育家と親日政府役人としての顔の他に、日本語教育者としての顔も持ち合わせ、日語基礎講座や日本語ラジオ講座の講師、教材の編纂など具体的な教育活動だけでなく、中国人を対象とした日本語教育において自らの理解と考えを有していたことを明らかにした。

また、彼が編纂した放送日本語講座用教材については、読む力の習得に重点が置かれ、学習者の母語との違いに着目した対照言語学的な視点、さらには自らの専門知識からの視点によるアクセントのとらえ方と補助教材としての歌の利用など同時期他の放送日本語教材にない特色を見出した。これによって日本占領下の北京における日本語教育のこれまでに知られていなかった新しい一面を明らかにすることができた。

柯政和については、その日本語教育に関する考え方が如何に形成したのか。また、日本占領下の北京の放送日本語講座がその後どのように展開していったのかは今後の課題である。

主な参考文献

日本語文献：

上田崇仁（2022）『電波が運んだ日本語 占領地・植民地におけるラジオ講座』風響社

小黒浩司（1987）「北京近代科学図書館史的研究Ⅱ」『図書館学会年報』Vol.33, No.4, pp.157-172

- 小野美里（2015）『日中戦争期華北占領地における文教政策の展開——「事変」下占領地の「内面指導」』2015年度首都大学東京博士学位論文・乙第113号
- 柯政和（1942）「華北に於ける日本語について」日本語教育振興会『日本語』第二巻第一号、pp.16-19
- 賈鵬飛（2019）『張我軍と日本語教育：1930、1940年代の中国大陸における「日本国籍」台湾人による日本語教育』文教大学博士学位論文
- 川上尚恵（2010）「北京近代科学図書館編纂日本語教科書分析からみた占領初期の中国華北地方における日本語教育の一側面—『初級日文模範教科書』から『日本語入門篇』へ—」日本語教育学会『日本語教育』146巻、pp.144-158
- 外務省情報部（1937）『現代中華民国満州帝国人名鑑』東亜同文会、p70
- 菊地俊介（2013）「日本占領下華北における新民会の女性政策」中国現代史研究会『現代中国研究』（32）、pp.1-18
- 興亜院華北連絡部（1940）「第四編 北京特別市日本語普及状況」『華北ニ於ケル日本語普及状況 其ノ五（最終編）』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C01002492200、p42
- 坂田篤義(2015)「大出正篤の日本語教材と速成式教授法」『リテラシーズ』（16）、pp.12-24
- 志賀幹郎（1995）「日中戦争時の北京における日本語授業研究—華北日本語教育研究所の活動—」日本語教育学会『日本語教育』85号、pp.123-134
- 鄒淑娟（2023）「日本占領下の北京における日本語ラジオ講座について」『2023年度中日韓三国国際学術シンポジウム予稿集』、pp.203-209

- 武田行雄（1940）『協和事業とはどんなものか』財団法人中央協和会、
p12
- 鄭曉麗（2022）『日中戦争下の音楽交渉：日本占領下の北京における音
楽活動に着目して』東京藝術大学博士学位論文、pp.10-13
- 中村重穂（2006）「宣撫班本部編『日本語會話讀本』の文献学的考察・
その2 南満州教育会 編纂教科書との比較を通して」『北海道大
学留学生センター紀要』第10号、pp.34-57
- 北京近代科学図書館（1937）『北京近代科学図書館館刊』（第二號）、
p190
- 北京近代科学図書館（1937）「本館編纂日文教科書使用の現状」『書滲』
昭和十三年八月號、p7
- 北京近代科学図書館（1939）『北京近代科学図書館概況』、p22
- 宮脇弘幸（2021）「日中戦争期日本軍占領区の文教政策—華北・蒙疆・
華中における日本語普及の展開」人文社会科学研究所『人文社会
科学論叢』No.30、pp.33-59
- 渡邊裕子（1990）「1940年代前半の日本語教育における『文型』と『教
授法』についての一考察」『茨城大学工学部研究集報』No.38、
pp.307-316
- 中国語文献：
- 郭豔波（2008）『論柯政和在我国近代音楽発展中的貢獻』青島大学碩士
學位論文、p3
- 孫芝君（1997）『日治時期台湾師範学校音楽教育之研究』台湾師範大学
碩士學位論文
- 王燕（2016）「抗戰時期的北平近代科学図書館」遼寧省档案学会『蘭台
世界』（2016.14）、pp.87-91

向延生（1994）『中国近現代音楽家伝』（第一巻）春風文芸出版社、
p177

中西利八（1942）『中国紳士録』満蒙資料協会、p142

教科書：

柯政和（1939）『初級日語講座読本』新民音楽書局

華北廣播無線電台（1937）『初級日語廣播教授課本』天津庸報社、上田
（2022）『電波が運んだ日本語 占領地・植民地におけるラジオ講
座』所収

中央協和会（1944）『協和国語読本指導要領』財団法人中央協和会

山口喜一郎 益田信夫（1940）『日本語入門』新民印書館

山口喜一郎 益田信夫（1940）『日本語初歩』新民印書館

山口喜一郎 益田信夫（1942）『日本語大要』新民印書館

